

# La Lettre

DE LA FONDATION FRANCO-JAPONAISE SASAKAWA



笹川日仏財団  
ニューズレター  
Vol. 1 No. 1

## 異なる文化の架け橋をめざして

### 8年目を迎えた笹川日仏財団

笹川日仏財団が1990年にフランスの公益法人として活動を開始してから、今年で8年目を迎えました。そして10年の節目を前に今年はフランスにおける「日本年」、来年は日本における「フランス年」に指定され、両国関係の新たな発展が期待されています。

設立以来これまで当財団は、教育、芸術、学術、出版などの分野で、140件余りの事業を支援、実施してきました。昨年までに400人程のフランス人学生や教師が日本を訪ねたり、100名強の研究者が双方で集いました。また、約100名の日本人アーティストがフランスでその才能を披露する機会を持ちました。

その中でも特に記しておきたいのは、ジャーナリストや若いフランス人の日本招聘事業

です。フランスでは全国紙より地方紙の読者が多く、その社会的インパクトが大きいことから、地方紙のジャーナリストを日本の地方紙に招いて、共同取材や両紙への記事掲載を通じて日仏新聞社同士の交流を図ってもらう企画を立てました。今までにル・プロバンス紙、マルセイユなどのジャーナリストがこのプ

ログラムによって来日しました。フランス人記者が執筆した数多くの記事によって、フランスの読者により深く、幅広く日本を知ってもらうことが出来たとでしょう。

また、日本語を学習しているフランス人高校生の日本研修を1995年から実施しています。レンヌ、コルマルなどの高校生が来日し、ホームステイや日本の高校生とのコミュニケーションを通じ、お互いの理解を一層深める交流が実現しました。

この他にも、芸術家が既成の枠組みを超え、互いに触れあうための芸術文化の紹介や、日本人とフランス人芸術家のコラボレーションによるプロジェクトを優先的に支援してきました。

日本とフランスをつなぐ唯一の二国間財団であることを生かし、異なる文化の橋渡しの役割をふまえながら、両国が出会う場を創出できればと考えています。

### 発刊のご挨拶

理事長 富永 重厚

日本とフランスの親善と友好関係を促進する手助けになればと、この度私どもの活動をより詳しくお知らせするためのニューズレターを発刊することとなり大変うれしく思います。

昨年シラク大統領が訪日致しましたが、それは日仏交流をさらに積極的に発展させたいという意気込みの現われです。しかし今日本はいえ、今だにバブル期の効率性や経済性を優先、発展を遂げるアジアに目を向けています。大きな価値観の転換を迫られている今こそ、アジアだけでなく生活面や人生観においても自身の確固たる価値観を持つフランス人の考え方を伝えることは私たちにとって意義深いものでしょう。日仏交流は地理的な問題や言語の壁などにより、十分に理解しえない部分を抱えています。しかしこの今こそ当財団が養ってきた地道な経験や努力を日仏交流の相互理解に役立てる使命があるのではないのでしょうか。

年二回発行

予定ですが、

どうぞ末長く

ご愛読ください。



1997年 8月 吉日



1994年に開催された「門脇俊一展」現代に甦った浮世絵の世界を初めてフランスに紹介

# うれしかった「コンニチハ」の一言

当財団の自主事業として今年で3年目を迎えた

「フランス人高校生招聘プロジェクト」は、ボルドー市の

国立マジャンディイ高校で日本語を学ぶ生徒を対象に行なわれた。

派遣先はボルドー市と1982年に姉妹都市締結をした福岡市。

共催の福岡市姉妹都市委員会が受入を企画、実行した。

3週間にわたり、市内見学や小旅行、

福岡商業高校の体験入学などホームステイの家族を含めた

交流が行なわれた。

マジャンディイ高校2年生の生徒11名

(男子5名、女子6名)と、引率の

先生2名が福岡空港に降り立ったの

が7月11日。生徒全員日本語を第3

外国語として学んでいるが、現在は

ひらがなとカタカナに続き漢字を勉

強し始めたばかり。会話ができるま

では至っていない。はたして言葉

が通じるのか。食べ物や生活習慣の

違いなどもある。不安と期待の入り

交じる交流のスタートが切られた。

1987年に日本語の授業を設置

したマジャンディイ高校は、学区内

では唯一日本語が学べる高校である。

従来の保守的な教育方針に捉われず



ボルドー市：人口約21万人、面積4,455ha

あったようだ。当初はホームシックも手伝い涙を流していた女生徒もいたという。しかし日本人に温かく受け入れてもらえたことで、その緊張は一気にほぐれていった。中学時代から日本語を勉強しているアリスさん(16)

生徒の自主性に任せるフランス流  
授業内容は、フランスと日本ではさほど差はなかったようである。ただし理系の科目は日本の方が進んでいるという。「日本で受けた数学の授業はフランスでは理系のみが受けるレベル」と法学部進学希望のジュリーさん(16)。ところが授業の進め方

日本人の思いやり、  
3週間の日程には国際都市としての福岡や太宰府などの市内見学、湯布院での初霧天風呂体験や阿蘇

イが何度注意しても三和土で靴を脱いでから上がってきたという。そこからさらにスリッパに履き変えることも感覚的に分らないらしい。ある生徒は市内の美術館見学の際、上履きを忘れたために入場できないのはと、不安ながら先生に質問したとまで。

外国語に力をいれ、新しい指針をめざす校風を打ち出している。また受入側の福岡市立福岡商業高校は、96年の歴史と伝統の中に土光敏夫氏など数多くの著名な人材を輩出してきた。20年前から環太平洋地域の国々を中心に留学生を受け入れている。フランスの高校生は今回が初めての試みである。

人をイメージしていたが、実際に触れた日本人は、明るく開放的で親切と彼らは口を揃えて言うのだった。一方、共に机を並べて学んだ日本の高校生にとってはスタイルも顔立ちもいいフランス人は憧れの対象。「とにかくスポーツは上手いですし、どこどなく洗練されていて存在自体がオシャレでカッコイイのだと思います。そばへ行ったり、アドレス帳を交換したり。昔と違って現代的な感じの憧れの念を表現しますからね」。福岡商業高校の高瀬文広英語教師は生徒間の交流の様子をこんなふうには話すのだった。

は大きく違ったようだ。「僕はクラブ活動でバスケットもやりましたが、何をやるにも統制がとれているのにはびっくりしました。練習に入る前のマラソンも、皆かけ声をかけながら一緒に走るでしょ。ぼく達はずっと自由。練習のしかたが違うんです」とジュリアン君(18)。彼は日本語も堪能で今回のリーダー的存在。授業中の感想に話が及ぶと「どの教科でも寝ている生徒がいたんですが、これにはがっかりしました」と歯に衣着せぬ感想を述べた。それは、渡仏して17年、日本語の教師になって10年目を迎える引率のピリオン・麻生先生に言わせれば「フランスの授業が暗記というよりも常に自分の意見を言わせるため。日本とは違う厳しさがたしかにあるという。特に今回の旅行のように集団行動では、先生ではなく生徒が中心。最後の日程で京都のホテルでの部屋割りには生徒たちに一任されるなど、あくまで生徒の自主性に任せているのがフランス流のようだ。



意外と器用？箸の使い方はおてのもの

山、原爆資料館のある長崎見学などが含まれた。しかしやはり彼らの印象に最も残ったのは生活を共にしたホストファミリーとの日々に見えるようだ。たとえば生活習慣の違いは自分たちが考える以上に根強いものがあった。中でも特に双方で首をかしげたのは、意外にも玄関での靴の処理。靴を脱いで玄関に上がることはすでに知識として教えられてきたようだが、実際にはホストファミリー

山、原爆資料館のある長崎見学などが含まれた。しかしやはり彼らの印象に最も残ったのは生活を共にしたホストファミリーとの日々に見えるようだ。たとえば生活習慣の違いは自分たちが考える以上に根強いものがあった。中でも特に双方で首をかしげたのは、意外にも玄関での靴の処理。靴を脱いで玄関に上がることはすでに知識として教えられてきたようだが、実際にはホストファミリー

山、原爆資料館のある長崎見学などが含まれた。しかしやはり彼らの印象に最も残ったのは生活を共にしたホストファミリーとの日々に見えるようだ。たとえば生活習慣の違いは自分たちが考える以上に根強いものがあった。中でも特に双方で首をかしげたのは、意外にも玄関での靴の処理。靴を脱いで玄関に上がることはすでに知識として教えられてきたようだが、実際にはホストファミリー



初めての書道、筆の運びに集中して

その食生活を通して日本人の親切心が話題に上った。ピリオン・麻生先生は「ホームステイのお母様たちは恐らく、卵は好き？量は？」と一つ一つ聞いてくださったと思うんです。それは生徒たちにはとてもうれしかったと思います。フランス人は他人にそんな風に気を使わないですよ。たしかに食べ物で口に合わないものはある。特に納豆はそのベスト1。全員がノンといった。他にはワカメやノリなど黒いものも苦手なようだ。「お弁当のおむすびで四角く切ったノリつきだけは一切手付かず。ならばノリをはがして食べればいいのと思いましたが(笑)」とホストマザーの大平みつえさん。歴史・地理の教師ビドゥ先生はそんな

な日本人をみて「思いやりの心」を強調した。「食べ物一つに対しても、ごく自然に身についた他人への思いやりの心がどれだけ私たちの緊張した気持ちを和らげてくれたことでしょう。この心が私たちとの関係を一足飛びに縮めてくれたのです。」

**アリガトウと**  
**アリガトウゴザイマス**

さらに彼らは実生活の中で日本人のきめ細かい対応に目を見張らされていった。

「ホームステイ先で、真っ先に注意してくれたのが、アリガトウゴザイマス」でした。アリガトウは知っていてもアリガトウゴザイマス

は知らなかったのです。オヤスミと  
オヤスミナサイもそうです。同じ言葉でも年上の人に対して使う言葉の違いを知りました。ジャン・バティスト君(18)は、最後のパーティのお別れの挨拶でさらに「きつと私たちには思いもよらない数々の失礼があったのだらうと今となって思います。でも日本の方が辛抱強くそれらをきちんと教えて下さったことに感銘を受けました。アリガトウゴザイマシタ(笑)」とユーモアを交えて話すのだった。

**まだまだ遠い国、日本を知ってもらうために**

旅程の最後、京都見学に向かうため16日間過ごした福岡を去る前夜、博多湾が眼前に広がるカフェで、福岡の最後の夜を惜しむパーティが行なわれた。そこでは、すでに気心の知れたホストファミリーたちと彼らとの温かい交流が持たれていた。レストランへ行ったら喫煙をはっきり断られたホストマザー。クールなフランス人を思い描いていたが、共に騒ぐ彼らを目のあたりにしてイメージが変わったという同世代のホストシスター。また買ってきた孫の手で夫の背中をか



福岡でのお別れパーティ、憧れの浴衣姿で

いてあげていた母親を引き合いに、日本家庭の男性優位を指摘する女生徒の話など会場は終始、なごやかな空気に包まれていた。

飛行機で片道12時間かかる距離にある日本は、フランス人にとって遠い存在だ。フランスへ旅行する日本人は年間150万人余り数えるのに対し、日本を訪れるフランス人はようやく50000人を越える程度。大部分のフランス人にとって日本はまだ未知の国といえる。しかしこの研修旅行の体験で日本が急速に近い存在になった彼ら。日本に「もう二度と来れないかもしれない」とつぶやく声もあれば、「また来るためにはどんな勉強をすればよいのか」と前向きに考える声も出た。「日本語の通訳になりたい」と決意した子。今回の研修旅行が、将来的に彼らに直接結びつく可能性はまだ未知。し

かし若いときに、こうして日本の生活を通して日本人を知った体験は、いつの日か日仏の友好関係を築く上で必ず深い意味を含んでいることだろう。

フランスへ帰国後、彼らは9月の新学期を待ち、今回の旅行展示会を高校で行なう予定だ。またビドゥ先生はこの体験を踏まえ、日本に関する講演を大学で発表するといふ。それぞれの思いを持ち帰り、この経験を今後にかすことで少しでも多くのフランス人に日本を知ってもらえるきっかけになること

**フランス人高校生招聘プロジェクト**

フランスで日本語教育を行なっている高校は、国際交流基金の1993年の資料によれば25校ある。例外を除き、第2、第3外国語としての教育で課外授業の形を取ることも多い。ヨーロッパ系言語を学ぶ学生たちは学校行事やパカンスなどで生きた言葉と文化を学ぶことが出来るが、日本語を学ぶ生徒には、旅費の問題でその機会を与えられないのが実情である。

このような状況に鑑み、当財団は日本に興味を持っている高校生を対象に招聘事業を開始した。日本の一地方に滞在して、受け入れ先の人々や同世代の若者との文化活動を通じて交流を深めることに主眼をおいている。

## A propos de nos projets...

最近の助成事業から

### 現代舞踊

#### 「子供たち」パリ公演

於メナジュリー・ド・パール劇場

パリ11区、地下鉄のパルマンチエ駅から歩いて程ないメナジュリー・ド・パール劇場。舞台芸術家の養成と先駆的な舞台の上演をになう小さな劇場である。ここで、日本人とフランス人のアーティスト7名からなる舞踊創作グループ、Prenon de WQ「子供たち」

が6月19日から3日間上演された。この作品は、長年に渡り大野一雄に師事した上杉貢代と、ヌーベルダンスの時代を生き抜いてきたオリビエ・ジェルブのデュエットである。

小さな台に座り身じろぎもせず、視線は遠方を向けたまま。ごくわずかな凝縮された動きで空間を緊張させること30分。その間ずっとクマンバチの羽音がバツクで響いている。2人は

立ち上がり、その感情を緊張から解放するかのよう踊る。しかし空気が張り詰めたまま。そして「夜明け」のタンゴ。この「型」だけを借りたカリカチュアとも見える踊りは軽いが、何か彼らに重くのしかかったまま2人の踊り手が心の底から解き放たれることはない。やがてまた、2人は小さな台に腰掛け、暗やみの中に閉じこもる。

急ごしらえのベンチは60人程しか座れないものではあったが、終演後拍手の音が人数以上に大きく聞こえた。3日間とも満席。見えた観客は極度の集中のためか、しばらくの間舞台の緊張感が乗り移ったままだった。感動ゆえの鳥肌もなかなか消えない。

「子供たち」は1994年、ジェルブがフランス外務省の奨学金を得て、日本に3カ月間滞在しており、上杉ら他のメンバーと共同で創作されたものである。舞踏と舞踊の出会いの素晴らしさが融合されている。

「物価が安いアジアの国」。若いフランス人のお医者さんが持っていた日本のイメージです。また、香港返還に際して「日本は中国に帰属するのか」との発言も。まさに知られざる国、ニッポンなのです。

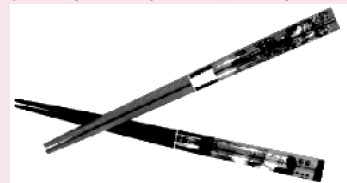


## A la carte

ア・ラ・カルト

フランス高校生の日本みやげベスト3

来日したフランス人は一体何をみやげに買っていくのだろう。また外国人に何をプレゼントするかは日本人にとって結構頭を悩ませることである。まして高校生ならば、ということでは福岡に滞在したポルドー、マジヤンティ高校の高校生が選んだみやげベスト3をご紹介します。まずほとんど全員がお箸を購入。値段も手ごろでかさばらず、



そして番外編で人気がプリントクラブことプリクラだ。友達同士はもちろんホストファミリイたちとの記念写真代わりとなって人気集中。スタンブ式のスタンブクラップを買った子もいた。因みにこのスタンブ、200回使用で500円。はたして彼らにとってそれが高いのか安いのか?



浮世絵などの柄が美しいのが人気の理由。次にお茶、日本酒と続く。やはり日常で実際に使えたり、楽しめるものが喜ばれるのだろうか。その他博多人形や、素焼きでできた相撲の力士人形などを大切そうに見せてくれた。日本の伝統的な文化に強い興味を持っている現われだろう。またキーホルダーやお箸置きなど小物で猫グッズが目についた。決して犬ではなく猫なのだ。猫は万国共通、フランスでも人気者なのだろう。そして何より季節柄、うちわや風鈴が喜ばれていた。おそらくホストファミリイと行った夏祭りの思い出がいっぱいつまっているにちがいない。日本の女の子が浴衣姿に風鈴のイヤリングをしていたのが風鈴を買ったきっかけになったとも。

そして番外編で人気がプリントクラブことプリクラだ。友達同士はもちろんホストファミリイたちとの記念写真代わりとなって人気集中。スタンブ式のスタンブクラップを買った子もいた。因みにこのスタンブ、200回使用で500円。はたして彼らにとってそれが高いのか安いのか?



## Petite note

編集後記

「物価が安いアジアの国」。

若いフランス人のお医者さんが持っていた日本のイメージです。また、香港返還に際して「日本は中国に帰属するのか」との発言も。まさに知られざる国、ニッポンなのです。

(M)

笹川日仏財団ニュースレター

## La Lettre

1997年8月発行 Vol. 1 No. 1  
 発行人：富永 重厚  
 編集人：横山 道雄  
 発行：笹川日仏財団  
 〒108東京都港区三田3-12-12  
 TEL：03 (3769) 6252  
 FAX：03 (3769) 2090  
 E-mail：matsugam@spf.or.jp

## プロジェクト・カレンダー

97年8月～12月

8月28日～9月6日

《現代舞踊公演「無限の自画像」》

《悲運のメキシコ女流画家に寄せる称賛》

《体の時間》協会/於喜多方 東京

9月8日～10日

《第5回日仏材料科学セミナー》

《メソ組織 物性との相関と機構のモデル化》

9月17日～23日

《A I U J A P A 会議》

《自然害や都市構想がはらむリスクの管理》

国際都市計画学会/於大垣

9月29日～10月4日

《日仏数学シンポジウム》

トポロジーの応用、

ブルゴーニュ大学/於ディジョン

10月26日～11月1日

《ネオ・ジャポネスク97》

《伝統技法とテクノロジーの融合による文化提案》

日本文化伝統産業近代化促進協議会/於パリ等

11月18日～27日

《日仏現代漆器展》

パリ本部/於パリ

12月10日～13日

《日仏セミナー》

バイオセンサーとバイオエレクトロニクス、

ベルヒマン大学/於トゥールーズ・ベルヒマン

日本に関する講演会

パリ本部/於パリ

9月25日《日本における合意の裏側》

10月2日《日本語の光と影》

10月16日《日本家庭における敷居と廊下》

10月23日《日仏企業における関係と意志決定》

11月12日《日本とヨーロッパの漆器》